

“A History – 21 Short Stories in Pictures – The University of Tokyo 1877 – 2000” 編集作業について

油井原 均

1. はじめに

東京大学史料室では、1997年に行われた東京大学創立120周年記念事業の一環として、『年譜 1877-1977-1997』（以下『和文年譜』と呼称する）を編集した。幸いなことにこの冊子は好評を得ることができた。そして、この冊子を基にして、留学生や海外来訪者を対象として、東京大学を歴史的な観点から紹介する冊子を作成してはどうか、という意見をいただいた。史料室ではこの意見を受けて、東京大学の歴史を英文により紹介した冊子の作成を行うことになった。

本稿は、英文による東京大学の歴史紹介冊子である *A History – 21 Short Stories in Pictures – The University of Tokyo 1877 – 2000*（以下『英文年譜』と略称）を作成するにあたっての編集過程を振り返り、編集作業上の留意点・困難点等を記録し、あわせて今後の課題の明確化に資することを目的としている。

2. 英文年譜作業の特徴

先に記したように、『英文年譜』作成作業は、『和文年譜』に寄せられた感想・要望に端を発している。ここで、ごくかんたんに『和文年譜』編集作業について述べておきたい。

『和文年譜』は、東京大学創立120周年記念事業の一環として1997年に作成が行われた。この冊子は、東京大学の120年間の主要な出来事を項目データ化し、それに写真・図録等を組み合わせて、大学を視覚的に紹介するという構成の冊子である。作成にあたっては、とくに『東京大学百年史』刊行以降20年間の出来事に重点をおく構成をとった。また、学外一般への配布を前提として、図録としての親しみやすさも考慮して編集が行われた。¹⁾

さて、『英文年譜』作成にあたっての初期の段階では、私たちは、できる限り『和文年譜』の構成を生かして作成を行っていくことを確認していた。基本的には『和文年譜』をそのまま英語化することとし、作業上必要な手直しのみを行うという考え方をとっていたのである。『和文年譜』作業の成果を可能な限り生かす、あるいは人員等の側面からみた作業の省力化、などから考えても、これは妥当と思われた方向性であった。しかし、作業を進めていくにつれて、『和文年譜』編集時とは異なる作業が必要となることが明確になっていった。以下その経緯を記す。

『英文年譜』は、データ収集を目的とするものではなく、主に海外からの大学来訪者・学生の方々に、東京大学の歴史・構成を紹介するところに第一の作成目的がある。この目的に沿った作業を行うため、まず私たちは、事務局の国際協力課に勤務されている日本語を母語としない方に『和文年譜』をみていただき、冊子全体についての感想や英文にする際に必要と思われる情報等について意見をいただいた。同時に、学内外の方々に『和文年譜』を見ていただき、これを英文化するとした場合の留意点等について意見をいただいた。また、英国・米国の主要大学に対して、歴史的視点に立って大学を紹介する冊子の存在について照会を行った。²⁾ これらは、『英文年譜』の構成を定めるための事前調査作業であった。

以上のような調査結果をふまえた上で、史料室スタッフ内で『英文年譜』作成上の問題

点について検討を重ねた。その結果、『和文年譜』の構成をそのままにして英文に訳したのでは、作成目的をじゅうぶん達することができないのではないのではないか、という結論に到達せざるをえなくなった。大学を視覚的に紹介するという目的は同一であっても、たとえば「赤門」「三四郎池」といった遺構について、それらの来歴を詳しく知らなくてもそれらが東京大学キャンパス内にあることは知っている（あるいはキャンパス内に存在することには違和感を持たない）人々を対象にする場合と、「赤門」等々について東京大学と結びつけて捉えていない（もしくは、そもそも「赤門」云々についての文化的背景を共有していない）人々を対象とする場合では、冊子の構成自体を変更する必要が生じることは避けられない、ということである。さらに、事前調査の際に寄せられた意見・要望からすると、年譜中心の構成の見直し（解説的文章による紹介の必要性）、日本文化と東京大学の関係や卒業生や雇外国人教師などの具体的人物紹介、といった観点をもつ必要があることも明らかになった。

以上のような経緯を経て、『英文年譜』作成に際して構成の大幅な変更が生じることになった。これ以降、史料室スタッフ内で数回にわたって基本方針や構成が話しあわれて、最終的にはForeign Instructors（外国人教師）やOrigin（前史）など21のテーマと各テーマの歴史的な解説的文章、簡略な年譜、という構成をとることになった。

編集作業を終えた現時点から省みると、このような大幅な変更はある意味で当然のことではあった。しかし、これらの変更は、必然的に『和文年譜』作成で蓄積した成果以外の『英文年譜』特有の作業を要求することになった。また、『英文年譜』が対象とする「日本語を母語としない人々」が私たちの編集意図をどのように受け取るだろうか、という問題が、以後の作業過程を通してスタッフ間で強く意識されることになった。

3. 『英文年譜』の内容構成

以上述べたような検討を経て、『英文年譜』は、次のような構成をとることになった。

1) 扱う年代

『和文年譜』では、前史を含めた東京大学創設以後の100年間は『東京大学百年史』で詳細に扱われているという判断により、1977年までの時期については簡易年表を掲載し、それ以後の20年間について詳細な年表項目を見開きページに掲載するという構成であった。これに対して『英文年譜』は、120年間についてはほぼ均等に扱うとともに、大学設立までの前史を含めて扱うことになった。また、年表項目は詳細に立ち入ることを避け必要最小限の概要におさえることとした。

2) テーマによる構成

特に明示はしなかったが、『和文年譜』においても、見開きページの構成についてテーマを設定し、そのテーマに沿って図録・写真類を配置していた。これを発展させるかたちで、『英文年譜』では、各ページを構成するテーマを設定し、さらにそれを明示することにした。テーマは、東京大学の歴史と近現代日本の高等教育史とを重ね合わせて考えたとき必要なもの、および大学自体を特徴づけているものを中心に考え、年代的偏りを避けることも意識して選定された。

数度の検討を経て最終的に採用されたテーマは、以下の通りである。[]内に英訳タイトルを併記した。

前史[Origins]

本郷キャンパス[Hongo Campus]
東京大学の創設[The Founding of the University of Tokyo]
外国人教師[Foreign Teachers]
東京大学と文学[The University of Tokyo and Literature]
帝国大学[Imperial Universities]
学内の日本様式[Remnants of Day Past]
卒業式[Graduation]
古い建物[Older Structures]
震災以後のキャンパス復興計画[The Hongo Campus Plan after 1923]
図書館[The University Library]
大講堂[The University Auditorium]
戦争と東京大学[The War and the University]
女子学生[Women Students]
旧制高等学校[The Higher Schools and University]
学生運動[The Student Movements]
周年事業[Anniversaries]
国際交流[International Relations]
海外留学生の派遣と受け入れ[Student Exchanges]
駒場祭・五月祭[The Komaba and May Festivals]
鳥瞰図・航空写真[Views of the University]

以上の21テーマに加えて、1970年代以降近年までに建築・竣工した学内建築・施設の写真によって構成した“New Buildings”、キャンパス三極構造・UT Forum 2000(2000年1月開催)・『淡青』(広報誌 1999年発行)・広報センター写真(1995年開所)などで構成した“The University Today”の二つのトピックを加えて、『英文年譜』は作成されることになった。³⁾

3) テーマについての歴史的解説文

文化的背景を共有していないと考えられる読者を想定し、その理解の一助としてもらうことを狙って、上述したテーマそれぞれについて800字程度の文章を記して写真等と合わせて掲載することとなった。

4) 写真・図録類

写真・図録については、『和文年譜』で使用された素材に対象を限定するのではなく、テーマの設定と関わって新しく必要となる写真・図録等を積極的に掲載することを目指した。これは、デザイナーの方との打ち合わせや、東京大学資料の保存に関する委員会(以下、「保存委員会」と略記する)における委員の方々からの意見もふまえたうえの方針であった。

4. 実際の作業過程について

以上のような内容構成にもとづいて『英文年譜』作成作業が行われた。以下、実際に行われた作業内容について述べる。

1) 解説文作成と翻訳作業について

翻訳は史料室外の専門家に依頼した。まず『和文年譜』制作時に作成された年表項目デ

一タがほぼすべて英訳に付され、それらのなかから『英文年譜』にふさわしいと考えられる項目を取捨選択していく作業が行われた。『和文年譜』とはことなり、120年間をほぼ均等に扱い、さらに項目数を厳選することから、年表の取捨選択については最終段階まで検討が行われた。写真・図表類や解説的文章の内容が年表項目の内容と重複する場合には、年表項目を割愛して重複をさける、という作業も行われた。

テーマについての解説文については、前述した21のテーマをスタッフ間で分担し、『東京大学百年史』などの資料を参照して、800字程度を目安とした解説的文章を日本語で作成した。作成された文章はスタッフ内で全文を通読検討し、内容の的確さ、あるいは史実の妥当性の観点から、記述について削除・訂正を行った。その後、文章は翻訳者に送付され、翻訳された。翻訳結果についても、再び全文をスタッフで通読検討して訂正を行い、訂正後の文について問題がないかどうか翻訳者に確認を依頼した。この過程では、和文と英文のニュアンスの問題をはじめとして、訳語の選択と統一などの多くの問題が生じた。特にニュアンスの問題については、最終的には、該当部分について翻訳者にこちらの意図と疑問点を伝えて回答をもらう、というやりとりを何度か経て決定する他にないため、一つの箇所について二度三度のやりとりを行うということになり、その結果相当の時間がとられることになった。訳語の統一については、訳文検討を重ねるなかでスタッフ内で確認された事項について一覧を作り、それに従って表記を整えていく方法をとった。二、三の例をあげれば、

- ・「徳川幕府」は“Tokugawa Government”ではなく“Tokugawa Shogunate”とする。
- ・「加賀藩」は“Kaga-han”と表記し、fiefの語は使わない。
- ・大講堂（安田講堂）は、文意上必要な箇所を除いて“University Auditorium”とする。

以上のようなものである。

このような作業が一通り終わったところで、保存委員会において翻訳文等の検討が行なわれ、翻訳文の表現や外国人の国名表記などの点についていくつかの有益な助言をいただくことができた。それらを総合する形で最終的な修正と確認を行い翻訳作業は終了した。

2) 機関名等の特定⁴⁾

1) で記した翻訳にも関わる部分であるが、固有名詞や大学機関名などについては、わたしたちの側で整理し提供しなければならないことが当初から明らかだった。特に今回の冊子は歴史的視点に立って編集されるのが大きな特色であり、現時点における機関名だけでなく、東京大学設立以前の前身校の機関名も含めて整理を行う必要があった。

現在存在する機関名については、隔年で刊行されている『東京大学英文一覧』（“The University of Tokyo Catalogue”）の記述によった。ただしこの冊子では判明しない場合もあり、その場合には大学の各機関が開設しているインターネット上のサイトを参照して、英語機関名を決定した。施設・設備名などについても、同様にサイトの英語版を参照して最終決定したものがある。

歴史的記述のために東京大学の前身校までを含めて機関名を特定する作業には、困難な問題が数多く生じた。

まず、次のような史資料を調査し、各機関の英訳名等を確認した。

The University of Tokyo（英文概要）

University Calendar(戦前期までの英文一覧)

『日本近代教育史に関する専門用語の英訳語基準化についての調査研究』（国立教育研究所

編)

しかし、大きな問題として、機関名・固有名詞の英語化に関して、調査した史資料間で異なった表記がなされている、ということがわかってきた。前身校の名称について例をあげると、大学南校は、英文一覧には“DAIGAKU NANKO”とあるのに対して、『調査研究』には“The Southern School of the University”や“Southern College (Nanko)”とある。あるいは、東京農林学校は、“College of Agriculture and Dendrology”（英文一覧）に対して、“Agriculture and Forestry School”（英文概要）、“School of Agriculture and forestry of Tokyo”（『調査研究』）とある。最終的に『英文年譜』では、前身校の機関名・固有名詞に関しては、基本的にローマ字でそのまま表記し、カッコを付して当時用いられた英語表記を掲載した。

また、日本語では同じ語を用いていても、英語では時代によって変化している例もあった。たとえば、明治初期の東京大学時代、「学部」を表したのは“Department”だった。それが「分科大学」となると“College”が用いられている。その後、「分科大学」は再び「学部」となり、英語呼称は“Faculty”となって今日まで続いている。あるいは、各学部の名称も時代とともに変化している。たとえば、“Department (College) of literature”であった文学部は、帝国大学令の改正（1919年）を期に、“Faculty of letters”と改称している。最近では、教養学部が“College of General Education”から“College of Arts and Sciences”へと改称している。これらのような例については、解説文や年譜部分などの該当する語に配慮し、それぞれの期間に使用されていたと考えられる訳語を採用するように努めた。

史資料の調査では機関名の英語訳を特定できないという例もあった。1939（昭和14）年に設置された臨時附属医学専門部がその例にあたる。“The War and the University”の解説文でもこの機関の設置が扱われているので、翻訳者とも相談の上、大学前身校の表記に準じて、“Rinjifuzoku-Igakusenmonbu (a provisional medical department)”と表すことにした。

3) 写真・画像の選定⁹⁾

前述の通り、当初『英文年譜』は『和文年譜』の英語版とするという考えで、構成、写真などは基本的に変更しない予定になっていたが、事前調査等を通して、テーマの設定と関わって新しく必要となる写真・図録等を積極的に掲載することになった。

写真の選定については、海外の大学で出版されている図録なども参考にしつつ、「一見して興味を引かれるような写真の使用」を考えた。ついで、テーマ別にそのページに合った写真を載せる、大学に関係した個人（卒業生や雇い外国人）の写真も積極的に取りあげる、ビジュアル的にも優れている「作品」と呼びうるものを掲載する、などが選定方針となった。その結果、『和文年譜』からの転載である数点を除いて、今回新たに使用したものが大部分を占めることになった。⁹⁾表紙に使用した総合図書館内部と三四郎池の写真、「The War and the University」における学徒出陣壮行会の写真、さらには大学紛争当時の写真については、写真家が撮影したものや新聞・雑誌等に掲載されたものを許諾を得て使用した。また、取りあげられたテーマとの関連上、工部大学時代英文で書かれた学位記や、戦後最初に東大に入学した女子学生の一人から借用させていただいた卒業証書なども掲載した。

掲載した写真類のほとんどは史料室以外で所蔵しており、学内、学外多くの機関にご協力いただくことになった。学内では、図書館、史料編さん所、埋蔵文化財調査室などから初期のころに関連する写真類を借用した。近年の写真は、事務局や各学部、アルバム編集

会（卒業アルバム用に撮りためた写真を所蔵）、古い建物に関しては工学部の建築学科などから借用した。学外については、東京大学に関連する記事の載っている雑誌や書籍から写真を選び、出版社や新聞社から掲載許可を取って借用した。写真を見つけだすために、近年新聞社などが提供しているデータベース（インターネット上で公開されている）を参考にしたことも何度かあった。

錦絵や浮世絵などについては、文京ふるさと歴史館、江戸東京博物館、神奈川歴史博物館、東京都近代写真館などの所蔵品のなかから東京大学に関連したものをスタッフで分担して検索・閲覧し、それらのなかから最終的に掲載する作品を決定した。絵葉書類も掲載したが、それらは切手や絵葉書を収集されている卒業生から借用した。

いずれの写真・図像類についても貴重なものであるため、借用するにあたってリストを作成し、史料室での保管、業者への引き渡しと返却確認、所蔵者への返却および完成品の一部寄贈までを滞りなく行うように努めた。

写真に付す説明（キャプション）については、史料室スタッフが作業にあたった。本文同様、英訳した場合のニュアンスの問題があり、検討を繰り返した。最終的には、該当分野に詳しい方や関係機関に問い合わせを行い、決定した項目もある。

キャプションの付け方については、以下のように統一した。

- ①本文の中に写真の説明となる文章がある場合は重複しないよう省略した表記をとる。
- ②古い写真については年代を明示。
- ③外国人氏名については、原則として英語圏での表記で統一。
- ④日本名は日本語読みと同じ姓名の順で表記。

最終的な作業場面では、提供者や撮影者の名前を入れる際の表記のあり方など、細かい作業の部分に意外な手間がとられるということもあった。ちなみに撮影者については [Photo:~]、提供者は [ownd by~] とすることで統一が図られている。

5. 終わりに

『英文年譜』作成作業は、当初考えていたよりもはるかに労力の多い困難な作業になった。作成に当たって予想外の事柄も多かった。結果として、作成された冊子は当初考えていた内容とはかなり様相が異なっている。しかしそれゆえに、この間の作業の結晶として、わたしたちにとってはたいへん意義深いものとなった。

作成された冊子の内容は、「年譜」という性格と同時に、東京大学を歴史的側面から紹介する「小史」としての性格も合わせ持っている。その意味で言えば『英文小史』という呼び方が、この冊子の内容にもっとも即しているとも言えるかもしれない。この冊子が、海外から東京大学を訪れる方々の大学理解に少しでも役立つことがあれば、たいへんうれしく思う。

英文年譜の編集に携わって、わたしたちは、東京大学に関する歴史的情報の発信準備が、国際化・情報化の流れに乗り遅れてしまっているのではないかという危惧を強くもった。今後、歴史情報を多様なかたちで発信していくための基盤整備を進めていく必要があると思われる。最低限、まずは前身校を含めた機関名や主要な歴史的事象について、とりあえず訳語を確定しておく必要はあると考える。日本の高等教育の歴史に関わってくるような基本的事項や教育内容の歴史的経緯などについても同様の作業が必要とされるだろう。

今回の作業は、東京大学の歴史を本格的に海外へ紹介する作業の「はじまりの一步」と

して位置づけることができるかもしれない。おそらくそう遠くない将来に、日本語以外の言語による詳細な東京大学史の作成が必要とされるようになるのではないか。そのときに備え、今から基礎的な作業を積み重ねておく必要性を強く感じる。

(ゆいほら ひとし 室員)

注

- 1) 詳細は、大島宏『『年譜 1887-1977-1997』編集に関する覚書 - 東京大学に関するデータ収集・整理の一環として-』『東京大学史紀要』第16号、1998年 を参照。
- 2) 『世界教育史大系40 世界教育史事典』(講談社、1978年)所収の「主要国大学一覧」をもとに、所在地を確認できた大学(137校)について照会を行った。照会に応じていただいた大学数は、14校(アメリカ5、イギリス9)。問い合わせに応じて、大学紹介の冊子を送付された大学もあった。それらのなかには歴史的観点を取り入れた冊子もいくつかあり、作業過程全体で参照し活用させていただいた。
- 3) “New Buildings” “University Today”については、現時点の東京大学の姿を視覚的に紹介するという視点より構成したため、解説的文章は付さなかった。
- 4) この節の記述は、「A History -21 Short Stories in Pictures- The University of Tokyo 1877-2000 の編集について」『東京大学史史料室ニュース』第24号、2000年の記事のうち、「機関・部局等の英語呼称について」(大島宏執筆)を参照した。
- 5) 以下の記述は、4)と同じ記事中の、「写真について」(末本千佳執筆)を参照した。具体的な借用手順や金額等も「写真について」に詳細が記されている。
- 6) 前出、末本千佳「写真について」に詳細が表として掲載されている。